
“悪”の運営委員会

十リス狩り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

“悪”の運営委員会

【Nコード】

N7896L

【作者名】

十リス狩り

【あらすじ】

悪の組織と正義の味方がいる世界。そしてそんな世界にある“悪”の運営委員会という組織の話。この小説はSS投稿サイトArcadia々々まで投稿しています。

一話目（前書き）

一話目です。

短いですがよろしく願いします。

一話目

「げっひゃっひゃっひゃ…正義の味方つてのもたいしたことないなあ」

「くっ…おのれ」

深夜、人気のない廃工場に響く二人の声…いや、一匹と一人のほうが正しいかもしれない。

片方は魚のような顔、首から下は人の身体、全身が緑色の鱗に覆われたまさに人が思い描く半魚人が現実に出てきたような姿をしている。

もう片方はヒーローショーにでも出てきそうなマスクとスーツを着た男だ。

「げっひゃっひゃ、アクアサンシャインよ…正義の味方といつてもこの俺、秘密結社『ディープダークネス』の怪人ハンギオンには手も足も出ないか」

「…っ！まだだ！くらえっ！必殺！トルネードクラッシュャー！」

男はそう言い、ジャンプをして高速回転しながら怪人めがけてとび蹴りをした。

「げっひゃっひゃ！そんな攻撃！俺に効くかつ！」

だが怪人ハンギオンはその攻撃をもともせず、アクアサンシャイン

ンを弾き飛ばす。

「ぐあっ！」

弾き飛ばされたアクアサンシャインは壁に激しくたたきつけられる。
そして…

「げっひゃー！これで終わりだーっ！」

ハンギョンの口から圧縮された水の塊が吐き出されアクアサンシャインめがけて飛んでいく。

「（くっ！俺はこんなところで終わって…）」

ドオオオオン！！

水の塊はアクアサンシャインを直撃して爆発した。

「げえっひゃっひゃっひゃ！これで目障りな正義の味方はいなく…！」

「いやー、それはこっちが困っちゃうんだよなあ」

今のこの場には合わないのんきな声が響く。

「げっ！？だ、誰だ！？」

ハンギョンは辺りを見回すが声の主は見えない。

「ああ、こっちだよーっち」

「げっひゃっ」

声がした方向は先ほどアクアサンシャインを吹き飛ばしたあたりだった。今は舞い上がった埃でまったく見えないが

「あーあー、全く空気読めてないね。正義の味方倒しちゃったら駄目じゃなか？」

埃が薄れるとそこにいたのは、黒髪のスーツを着た青年…いや、へたをすれば少年にも見える若い男だった。

「げひゃ？ガキ？」

予想外のことにハンギョンは首を傾げる。

「いちおーこれでもお酒は飲める年齢なんだけどなあ…」

相変わらずなのんきな声で答える青年

「げひゃ。なんでガキがこんなところにいるかわかんねえが、まあいい。死ねー！」

「だから、お酒飲める年齢だって…」

ハンギョンは先ほどアクアサンシャインに放った水弾を青年に向けて吐きだした。

ドオオオオン！！

「げひゃひゃ、まあこれで終わっただろう」

「いやー、終わらないんだけどなあ。これが」

「げひゃ!?!」

ハンギョンは目を丸くした。正義の味方であるアクアサンシャインを葬った一撃をこのただの一般人のガキが全くの無傷で立っていたのだ。

「まあ、そんなに驚いてないでこっちの話聞いてくれないかなあ? 秘密結社『ディープダークネス』の怪人ハンギョンさん」

「!?!」

ハンギョンは驚き後ろに飛び退いた。

「げひゃ!なぜ俺の名を!?!」

ハンギョンは警戒した。ただの一般人だと思っただけの攻撃には無傷で、その上自分の素性を知っているのだ。警戒するには十分すぎる理由だろう。

「え?ああ、なんだ知らないのかあ。私:いや私たちのことを」

男の意味深な言葉にハンギョンはさらに警戒する。

「:お前、いったい何者だ!」

それを言われた青年は「良くぞ聞いてくれました」と言わんばかりに手をたたき、ひとつ咳払いをして

「えー:こほん。それでは申し遅れました。私は日本“悪”の運営

委員会。会員？00013…執行部所属ヒラサカユウジと申します。
以後、お見知りおきを」

一話目（後書き）

感想お待ちしています

「話目（前書き）」

「話目」です。

よろしくお願ひします。

二話目

前回のあらすじ

秘密結社『ディーブダークネス』の怪人ハンギョンの前に現れたのは“悪”の運営委員会と名乗る謎の人物だった！

「…“悪”の運営委員会？なんだそれは？」

「“悪”の運営委員会は悪の組織、秘密結社の皆さんの監視、管理、保護などを目的とした団体で、組織設立のお手伝い、下っ端戦闘員さんの派遣、組織運営のお手伝い、怪人さんたちの監視、小さな組織が大きな組織に飲まれないようにしたりとか、ほかの組織との活動区間がかち合わないようにするなんてのも…あと…」

「げひゃ！なんだ！そのふざけた組織は！」

ハンギョンの激昂も無理はないかもしれない。たしかに「なんだそれは？」といいたくなる組織だろう。

「いや、これでも真面目なんだけどなあ」

あはは…と言いながら頭をかくヒラサカユウジ。そんな男を見るハンギョンの顔はますます険しくなっていく。

そんなハンギョンの気持ちを察したのか、こほん…とひとつ咳払いをして

「まあ、その詳しい話は今はおいといて…今回あなたに接触したのは、あなたの所属する組織と我々との契約が破られそうになったからでしてね…」

「契約…？」

ハンギョンが訝しげに聞く。

「まあ、単純に言うと“正義の味方には勝つてはいけない”っていうのが破られちゃいそうでしたんで」

「はあ！？なんだそれは！？」

ハンギョンは大きく目と口を開いて驚いている。

「なんだそれは！？って言われても…これはほかの悪の組織さんたちも守ってる一番大事な約束事ですからね」

“お約束”ってやつですね…と笑うヒラサカ

「…」

もはや言葉も出なくなっているハンギョン

「普通はこういう“こっち側のルール”ってやつは組織に入ってる人なら最初に叩き込まれるもんなんですが、最近の悪の組織はそういうのちゃんとしてくれないんすよねえ…おかげで仕事が増える増える…」

やれやれ…と両手をあげ首を振るヒラサカ

「まあ、そういうわけでハンギョンさん。ここはひとつこの…」

と、いつのまにか床に寝かされているさつきハンギョンにやられたはずのアクアサンシャインを指差しながら

「アクアサンシャインさんにさっきのトルネードクラッシュャーって
いう必殺技を食らってやられたということにしときますんで、私に
さっくり倒されちゃってください」

ヒラサカはにっこりと笑いながらハンギョンに告げる。

「…げひゃ？…ちょっと待て！どうしてオマエに倒されなければなら
ない！」

ヒラサカの発言に我に返ったハンギョンは慌ててある意味もつとも
な発言をする。

「今からこの人起こして仕切りなおすのも面倒だし、私があなたを
倒してアクアサンシャインさんの記憶をサクッと捏造してしまつた
ほうが早いですからね」

そう笑顔で言いながらハンギョンに近づくヒラサカ

「げひゃ！近寄るんじゃないやねえ！」

ハンギョンは水弾を吐き出す

「効きませんよ。こんなもの」

ぺしつと片手で弾き飛ばすヒラサカ

「げひゃ！？嘘だろ！？」

「…普通に考えてこんな風に悪の組織のみなさん管理するゝなんて言ってる機関の人間なんですから、怪人さんとかへの対抗手段くらい用意してるに決まってるじゃないですか」

当たり前でしょう？と言いたげな顔でヒラサカは言う。

「簡単に言うとラスボスとか余裕でフルボッコくらいの力はあるんですよ。私一人だね。そのくらいないと悪の“お約束”を守らせられませんからねえ」

そう言いつつそんな言葉に固まってしまったハンギョンの目の前に立ち

「まあ、死にはしませんからご安心を」

右手を振りぬいた

「げひゃ あああ！」

ドゴオオオン！！

顔面にくらったハンギョンは真っ直ぐ後ろにふつとび、壁に激突してさらに突き抜けていった

「やりすぎた？まあ、いいか。あとはアクアサンシャインさんの記憶をちよつと弄って、ハンギョーンさんは回収班にまかせて…」

ああ、あと『デーブダークネス』に行って今回のことの嚴重注意
…と」

ああ忙しい忙しい…と言いながらアクアサンシャインの頭に軽く触
れたあと、その場から去っていった。

ヒラサカが去ったあと…

<視点：アクアサンシャイン>

「うっ…」

…オレはどうしたんだっけ…？

「たしか…」

悪の組織『デーブダークネス』の怪人ハンギョンと戦って…

「勝ったんだよな…たしか…」

そう、苦戦したが最後は必殺技のトルネードクラッシュャーでとどめ
をさしたはずだ。こんな感じに…

「クラエー！ヒッサツ！トルネードクラッシュャー！」

「ゲヒヤ〜！ヤラレタ〜！」

「何で倒れてたんだオレ…？くっ！」

…頭が…イタイ…

『オレハ、ハンギョンヲオシタケドソノマエノダメージガオオキ
カッタカラキヲウシナツタンダ』

…そうだ、ハンギョンから受けたダメージがひどくて気を失ったんだった。

「…ハンギョンは倒せたし…帰るか」

明日は早いしな…

「まったく、正義の味方は大変だな…」

そんなことを呟きながら俺は帰るのだった…

一話目（後書き）

感想お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7896/>

“悪”の運営委員会

2010年10月13日16時27分発行